
月から来た少女 イナイレ

うむうむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月から来た少女

イナイレ

【Nコード】

N8583Y

【作者名】

うむうむ

【あらすじ】

雷門中学にやって来た転校生

月影四季菜

彼女にはある秘密があった

月から来た少女 イナイレ

私は月から来た

いつか

かぐや姫のように

帰らなくてはならないのだろうか

やがて

FFIも終わり

桜の季節がやってきた

円堂達は三年生になっていたー

円堂 「今年も同じクラスなんてな♪ よろしくな
? (二カッ)」

豪炎寺 「ああ、俺の方こそよろしくな (微笑)」

鬼道 「お前達と一度は一緒のクラスになりたいと思って
いた 楽しみだな (フッ)」

ガラガラッ? ピシヤリ?

先生 「おゝい みんな 席に着け? 今日
は転入生を紹介するぞ」

男子ABC 「おおゝ!..。..*☆ かわいい女だといいな
? ?」

女子ABC 「ええゝ!!? イケメン君がいいな?
(ってかこのクラスにはすでに鬼道、豪炎寺のイケメンコンビ
がいるけどお (キャア (≧▽≦))」

男女ABC 「先生、どっちですか?!?!?」

先生 「女生徒だ、月影、入りなさい!」

四季菜 「月影四季菜です:よろしくお願いします」

全員 「……………かわいい……………くない……………
ッ」 (㏊ ;) ガク

皆にそう思われるのも無理はない

なぜならそこに立っていた四季菜は 真っ黒な

髪をきっちり三つ編みお下げにし、牛乳ビンほどの厚底眼鏡をかけていたからだ

その見た目は かわいい からは到底かけ離れていた

先生 「席は学級委員の近くがいいからな、お？ 鬼道の前が空いてるな、月影、あの席へ座りなさい」

「はい」 四季菜はそう言うと言席まで歩いていった

後ろの鬼道が話しかける

鬼道 「学級委員の鬼道有人だ、分からない事があったら何でも聞いてくれ」

四季菜 「はい…」

豪炎寺 「豪炎寺修也だ よろしくな」

隣の席に座っていた豪炎寺もあいさつをしてきた

四季菜 「…よろしく…」

(暗い女だなあ…) 鬼道と豪炎寺はもうコイツには自分から話しかける事はないだろうと思った

下校時間 キーンコーン

円堂 「月影え？（＾Ｏ＾）」

四季菜 「はい…？」

円堂 「よろしくなっ 俺、円堂守？ サッカー部の
キャプテンやってるんだ？ 月影は 部活は何か決
まってるのか？ よかったら一緒にサッカーやらないか？（
ニッ」

鬼…豪 Σ（。㇏。111（汗）ゲッ？ マジかよ？

四季菜 「悪いけど、サッカーなんて全く興味無いんで遠慮し
ときます」

四季菜は愛想笑いもせず淡々と断った

円堂 「？ あれえ お前なんつかサッカー好きなんじゃな
いかな／＼なんて気がしちゃったんだよね、勘違いだったか、ゴメン
な／＼／ まあでも、いつでも気が変わったらきてくれよな
！！」

円堂はそう言うとその場から去って行った

鬼道 （どこがサッカー好きそうに見えるというんだ（一。一；
やっぱアイツは天然だな…）

豪炎寺 （本当に円堂のヤツ… 誰でもとりあえず誘うんだ
から困ったもんだ 俺や鬼道目当ての女とか断るのに大変だ
ったんだぞ？ 俺達の苦勞も知らないで…）

二人はとりあえずホッとしていた

帰り道――

四季菜は一人考えていた

（アイツ：何で私がサッカー好きだって分かったんだろう……？
フツ 円堂守：か どんなヤツなのか少し調べてみるか…
： ついでに鬼道と豪炎寺の事も……同じサッカー部みたいだからな）

私がこんな格好をしてるのも

全ては人を寄せつけないため

ああ サッカー やりたいなあ

でもそんな事したって……私は……

その後

とある数学の授業時間

先生 「この問題はちょっと難しいぞ 誰か解ける者？
？……何だ誰もいないのか？鬼道、お前はどうかだ？」

鬼道 （学年トップの意地としてここはあざやかに解いてみたいもんだが…）

「すみません、時間をかければ解けそうだと思うんですが…」

先生 「そうか、では月影！ 転入生の試練だ（笑）出来る所までやってみなさい」

四季菜 「…はい…」

四季菜は席を立つと黒板の前に行った

そしてチョークを手にしたかと思うと糸も簡単に計算式や数式を書いていった

男子A 「あんな式、習ってねーゾ??」

女子A 「間違って書いてんじゃないの?」

皆きょんとしていた

先生 「おいおい? その計算式は中学では習わないぞ? お前どこで教わったんだ? もっと簡単な式で書いてくれ！」

四季菜 「すみません、失礼しました…」

四季菜はそう言うのと全てを消して一から書き直し始めた

鬼道 （全部消すなんて…? 問題の数式も全て頭に入って

いるというのか…？)

先生 「ご名答？ 良く解く事が出来たな よし、席に着いていいぞ」

豪炎寺 「頭はいいみたいだな」

鬼道 「ああ、いいライバルになりそうだ (ニヤリ)」

しかし体育の授業ともなると四季菜は全く目立たなかった
球技ではボールにふれる事すら出来ず 陸上なんかはいつも最後の
方のタイムだった

豪炎寺 「あいつ、運動神経は良くないみたいだな」

鬼道 「ああ」

だがこの二人の考えは間違っていたことになる

それは放課後のこと

円堂達三人は部活を終え、帰り道を歩いていた

円堂 「…なあ、あそこにいるの 月影じゃないか？？」

豪炎寺 「本当だ、あんなとこで何やってんだ？？」

四季菜は路地の端で一組の親子と話をしていた

女の子 「うえーん！！うえーん！！（泣）」

母親 「あんな高い所に引っかけたはもう取れないのよ、あきらめなさい。○○ちゃん」

どうやら女の子は風船を目の前の高い木に引っかけてしまったようだ
あきらめきれないといった様子ですとその場から離れない

「……おばさん、ちよつとこれ持ってて??」

四季菜はそう言う自分の通学カバンを母親らしき女性に手渡した

鬼道 「あいつ、何やるつもりだ……？？」

四季菜はいきなり風船が引っかついた木に登り始めた
そしてあつという間に上の方へたどり着くと引っかついていた風船
を自分の方へたぐり寄せた
次の瞬間――！！！！

一番上から二回転半位のジャンプをして地面に着地した

「……なつ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！（驚）」

円堂 「スツゲえええー?（（（;。Д。）））））
あんな高い所からジャンプしたよ ……っハハッ!!」

四季菜はだまって風船を女の子に手渡した

母親 「すごい？ 本当にどうもありがとうございました？」

女の子 「お姉ちゃん？ どうもありがとう！！！！」

親子は深々とお辞儀をすると歩いて行った

その後ろ姿に四季菜は手を振っていた

鬼道 「運動神経が無いとは思えないな……？」

豪炎寺 「一体どういうことなんだ……？」

円堂 「おおーい！！ 月影えー！！」

円堂達は四季菜の元へ駆け寄った

四季菜 「！！ タイミング悪っ 見られたか…… (汗)」

円堂 (目がキラキラ☆ 「今のすごかったな…… やっぱ俺の目に狂いはないっ！ 一緒にサッカーやろうぜ！！」

四季菜 「何度も言うけどそのつもりはない！！ もう私に構わないで……？」

四季菜はその場を立ち去ろうとした

鬼道 「待てっ！」 鬼道は四季菜の腕をつかんだ

四季菜 「痛いっ？ 離して……？」

振りほどこうとするが鬼道はがっちりつかんだ手を離さない

鬼道 「お前、何か裏がありそうだな、何故運動神経がいいのをわざわざ隠している？」

四季菜 「フツ：さすが天才ゲームメイカーさんね

、勘が鋭い：」

「私はあなたの事知ってるけどね」

鬼道 「？：」

四季菜 「鬼道有人： 幼少からサッカーの才能がズ

バ抜けており影山零治に見出される

その後鬼道財閥の跡取り息子となる

サッ

カー界において常に冷静な司令塔をこなした天才ゲームメイカーと呼ばれる 但し影山に翻弄された時や妹の音無春奈が

関わりと判断を見誤る傾向あり」

鬼道 「お前：？ どうしてそれを：？」

鬼道は四季菜から手を離れた

四季菜 「まだ知ってるわよ 豪炎寺修也

同じく幼少の頃よりサッカーの才能を開花させ

天才エースストライカーと呼ばれる

鬼道と同じで妹の豪炎寺夕香が関わると

冷静さを失う」

「最後に円堂守： 幼少期に祖父のサッカーの秘伝ノ

ートを見つけそれ以来サッカーの虜となる 努力は

人一倍 それに伴い根拠が無くても人に対し常に信頼

をおく その為信頼をおかれた者は心を開く事とな

り今では多くの者が彼に絶対的信頼を持っている

中でもその二人は特に…ね？

「フッ」

豪炎寺

「お前…何者なんだ…？」

四季菜

「ちょっと調べればすぐに分かる事よ、でも安

心して

私はあなた達の邪魔をするつもりなどこれっぽっちも

ない

ただ毎日平穩に過ごせばいいだけ

だからもう私に話し

かけないで？」

四季菜はそう言うところから去って行った

月から来た少女

イナイレ

第二章

謎の少女月影四季菜

あいつの正体は一体…？

昨日あのようなやりとりがあったにも関わらず四季菜は何事も無かったかのように授業を受けていた

円堂達も話しかける事は出来なかった

今まで四季菜に目もくれなかった鬼道が今日は後ろの席からじっと見つめていた

鬼道 （左手首が少し赤くなっている…

昨日

俺がきつくつかんだから…

何だか少し悪い事したな…

こいつ…よく見ると髪が綺麗なんだな、手も細くて雪みたいにも白い

少し覗いてるうなじはもっと透明感がある

眼鏡を取ったら、素顔はどんなヤツなんだろう…？）

豪炎寺も同じ事を考えていた

豪炎寺 （こいつ…よく見ると爪の先まですげえ綺麗だな、今

まで気付かなかった　　耳も
真っ白で小さくてかわいいな…
素顔も…見てみたい　　)

鬼…　豪　（はっ？／／／／俺は何を考えてるんだ？
どうかしてる？）

四季菜は二人の視線に気付いていた

四季菜　（マズイ…　二人が私に興味を持ち始めてる…
）

四季菜　「先生　！！」

先生　「どうした、月影　??」

四季菜　「私、また視力が悪くなってしまっ…ここからじゃ
黒板の字が見えないんです　！　一番前の席にして下さい　！」

先生　「そうなのか、うゝん…　一番前の席といっても空い
てないからなく…　誰か代わってくれる人、いないか　？」

前列に座っている女子全員　「はいっはいっはゝゝい
！！！！　？」　手を上げた

「　鬼道君や豪炎寺君とお近づきになれるならっ？　　い
くらでも　？　(≡▽≡)」

鬼…　豪　（———）…

四季菜　（よしっっ？　　）

鬼道 「先生！」

先生 「何だ、鬼道？」

鬼道 「月影には今色々学級委員として教えている最中なんです、彼女がスムーズに学校生活に馴染めるよう、僕も責任を持ってやっているつもりです、視力が下がったと言うならそれに見合った眼鏡を一緒に探しに行ってきます…
なので席はこのまままでお願いします（キリッ）」

先生 「そ、そうか、分かった（^^;;」

鬼道がそこまで言うならそうしよう
と、いうワケだ、月影、早く新しい眼鏡を買って来いよ」

女子全員 「チェッ？」

四季菜 「学年トップだからって先生も言いなりかよ？
あゝ やだ、もう」

放課後――

四季菜 「ちょっと！ さっきから何でついてくんのよっ
！！」

鬼道 「言っただろう？ 新しい眼鏡と一緒に探しに行くって

： (ニヤリ)

四季菜 「眼鏡なんか買い替えないわよ、視力が落ちたなんてウソなんだから」

鬼道 「やはりな…フツ」

四季菜 「だいたい何で後ろの二人までついてくんのよっつ！
おかしーでしょーが…？」

円堂 「ええっと…あのう…えへっ (汗)」

豪炎寺 「…………… (ーー；)」

円堂 「いやぁ俺達、お前の正体気になっちゃってさ (焦) い加減教えてくれないかな？」

鬼道 「はっきり言おう まずはお前の素顔が見たい」

豪炎寺 「同じく…」

四季菜 (変態… (^^;;))

円堂 「俺達昨日あの後さ、どうしてもお前の事知りたくて理事長の娘の夏未に頼み込んで調べてもらったんだ、そしたら学校に提出された書類に書いてあったような履歴や経歴は全く無い事が分かったって…全てウソ…なんだろう？
なあ、何でなんだ？

俺達で力になれるなら、話してくれないか？！」

四季菜 「……誰に話しても何も解決しない……何も変わらない、変える事なんか出来ないっつー!!
…ウソをついていんだから私はもう退学ね、皆さん、さようなら ！！」

やっぱり私にはー

希望なんか………ないー

「待つんだ ！！！」

四季菜 「／／／……鬼……道く……／／／」

円…豪 「！！」

俺は四季菜をとっさに抱きしめていた

鬼道 「す、すまないっ……／／／ ついっ？
諦めないで、話してくれないか？」

鬼道は四季菜から離れた

お前の心の闇を……俺ははらしたい……

円堂 「諦めたら、そこで終わりだ
諦めない限り、終わりはない？」 (ニッ)

豪炎寺 「フツ…諦めの悪い所が俺達のモットーだ？」

四季菜 「!!!!!!!!!! …………」

もう一度……

あがいてみても

いいのかも知れない……

私は心を決めた

四季菜 「話を聞きたいならついてきて」

四季菜は細い路地に入ると二つ目の角を曲がった
円堂達はすぐ後ろを歩いて行った

しばらく歩くと一軒の家の前まで来た

円堂 「ここは？」

四季菜 「私の家よ 遠慮は要らないわ、上がって」

円… 鬼… 豪 「お邪魔します？」

四季菜 「そんな大きな声で挨拶したって誰も居ないから」

円堂 「家族は？出かけてるのか？」

四季菜 「父親は亡くなった… 母親は仕事で海外にいるし兄弟も居ないから私一人よ」

鬼道 「結構広い家だな、ここにお前一人だけで住んでいるのか…？」

玄関からリビングへ続く廊下の壁には使い古しのサッカーボールがネットに入って掛けられていた

見た所ドアがいくつもあり部屋数は多そうだ

豪炎寺 「サッカーボール：これ、お前のか？」

四季菜 「（コクン…） 昔はやっていたからね」

鬼道 「幾つ部屋があるんだ？」

四季菜 「八つ…でも実際使ってる部屋は半分だけ…母がこっちに戻った時に使う二つと私が使っている二つ」

円堂 「あれ？ ドアが開いてる、この部屋は？」

四季菜 「ああ、そこは私のアトリエよ 絵を描くのが好きなの」

鬼道 「水彩画、それに油絵もあるな？ どれもすごいな…？ これだけのものが描ければ賞も総ナメだろう？」

四季菜 「コンクールに出した事は一度も無いの：だから賞なんて何にも取ってないわ（微笑）」

円堂 「何でこんなに描いたのに出展しないんだ？自分の実力を試したくないのか？」

四季菜 「私には時間が無いの 賞なんか必要無い、好きな絵を描ければそれでいいの」

四季菜はさみしそうな感じで下を向いた

四季菜 「まあ、とにかく座って、今お茶入れるから、みんな、冷たい麦茶でいい？」

円… 鬼… 豪 「あ、ああ……」

みんなー黙って麦茶を飲んでいた
沈黙が続く中、端を発したのは四季菜だった

四季菜 「さあて、何から聞きたい？」

月から来た少女 イナイレ 第三章

鬼道 「聞いたら何でも答えてくれるのか？」

四季菜 「覚悟は出来てる」

豪炎寺 「ならまずは俺から聞く…

お前、どこから来たんだ？ 前はどこに住んでいた？」

四季菜 「私は……月で……産まれたの」

円… 鬼… 豪 「！！！！ つ…月イ…？？」
(驚)

四季菜 「1960年代に人類が初めて月面着陸したのは知ってるわよね？」

実はそれには続きがあって70年代、80年代、90年代と極秘の国家機密で人類は何度も月に降り立っているの……」

鬼道 「確かにあれから人類は月に行こうとしていないのは俺としても疑問はあった
だが何故極秘で行っているんだ？ 目的は何だ？」

四季菜 「目的？ 答えは簡単よ、人類移住計画、まずは科学者から行って地固めをするってわけ…
80年

代からは地下に大型都市まで出来上がったわ

私の両親は二人共NASAに勤める技術者だったの

二人共月に派遣されて月で年月を過ごすうち……恋に落ちた……
そして産まれたのが私ってワケ」

円堂 「何で人類が移住しなくちゃいけないんだ？」

四季菜 「地球の寿命は限られてる……温暖化によってね、地球が無くなるのはまだまだずうーっと何百年も先だけどその時に備えていたのよ、でも……」

豪炎寺 「でも……何だ？」

四季菜 「私が10歳になるまでは、毎日がとても楽しかった、人口も500人位に増えて、サッカーチームもあったりして……充実していた、幸せだった

でも私が10歳になったある日、一人の独裁者が生まれたの、彼に洗脳された人は彼の命令に服従した、洗脳されなかった人もいたけど、彼等が恐ろしくてみんな、言いなりだった……

大好きだったサッカーも娯楽なんかと禁止された……

そして私が12歳の頃私の父親が監視の目をかいくぐって地球にSOSを発信したの

すぐに地球から私達を助け出す為にスペースシャトルがやって来た私達は急いでそれに乗り込んだ

……でも……父は……他の人達を先に乗せる為に……自らが彼等の……盾になって……殺された……

うっ……うぐっ……ひっく……

私と母は……父を残して自分達だけ……ううう……」

円堂 「そ……んな事が……あったなんて」

鬼道 「辛い思いをしたんだな……」

豪炎寺 「何てヤツだ…絶対許せねえ！！」

円堂 「月影、自分を責めちゃダメだ？」

お父さんは自らの命を懸けてまでお前とお母さんを守りたかったんだ、助かって欲しかったんだ？ きつとお父さんはお前が落ち込むのを見たくなんてないはずだ？ そうだろ？」

鬼道 「俺もそう思う」

豪炎寺 「ああ？ お前は父親の分まで幸せにならなければだめだ？」

四季菜 「みんな…ありが…と…」

私は涙を拭いた

「でも私は幸せになる事は出来ない…」

豪炎寺 「？ 何故？」

四季菜 「月から逃げ出すあの時…あの男は言ったの——私が15になったら迎えに行く…」

私はきつと逃げられない…どこにいてもあの男は私を見つけ出す…

怖い…毎日が…こんなに変装して、世界中を逃げ回っていたのに…何をしていてもあの男の言った言葉が頭から離れない…？？？」

鬼道 「15になるのは…いつなんだ…？」

四季菜 「あと一ヶ月きったわ…」

母は今NASAにいるの――

もし月から不穏な動きがあったらすぐに分かるように監視してくれてる

日本ではJAXAの人が見守ってくれてる

でも…それでも怖いの…

だから、私に未来はない、分かったでしょ？

これが本当の私――

月から来た少女

イナイレ

第四章

く鬼道の気持ちく

俺はコイツを守りたい

胸から熱い何かが込み上げる

何故こんな気持ちになるのだろう

昔の心を閉ざしていた頃の俺に似ているからだろうか

いや、違う

もっと何か

まさか

恋……？

まさか……な

まだ素顔も見えてないっていうのに……ありえない

でもこの気持ちの高ぶりは何なんだ……？

く豪炎寺の気持ちく

鬼道がめずらしく動揺している

そういう俺もかなり動揺している

コイツをこれ以上悲しませたくない

何とかして安心させたい

何だろうなこの熱い思い

まさか好き…にでもなったとか？

まさか

そんな事はないだろ

だが

この胸を締め付けられる感じは何なんだ――

鬼道 「俺がお前を守ってやる！！」

豪炎寺 「俺も守るぜ！！」

円堂 「俺達は昔宇宙人と戦った事もあるんだぜ??

月だか何だか知らないけど、絶対にお前の事、守ってみせる！！

もっと信用しろっつ 俺達を？ (ニヒッ)

四季菜 「ありがとう…私…ずっと誰かにそばにいてもらいたかったのかもしれない…

そばにいる人に…守ってやるって言ってもらいたかったんだ…きつと……う、う、うわあああん (大泣)

四季菜は円堂に抱きついた

鬼…豪 「?!えっ？」

円堂 「／／／／えっ?…／／／あの…ちょっと…／／／」
「お、俺 こーゆーの慣れてなくてさ、ごめんなっつ (照)」

四季菜 「ううん、いいの、こっちこそゴメンね…」

四季菜は円堂から離れるときちんと涙を拭く為に眼鏡を外した

鬼道 （もしや素顔…が…）

豪炎寺 （見える…？）

四季菜は三人に背を向けたまま、こう言った

「私の素顔……見たい？」

円… 鬼… 豪 「あ、ああ、もちろん！！」

四季菜 「…見せてもいいけど、ひとつだけお願いがあるの
」

鬼道 「何だ？」

四季菜 「私の事……好きにならないって約束して」

円… 鬼… 豪 「……………！！！！！！……」

四季菜は三人の方に向き直った

大きく開いた漆黒の瞳 中心は宇宙の青さのように無限の奥深
さがあった

長いまつ毛は瞬きする度にふわっと揺れ、より一層魅力的にするの
であった

バランスのいい鼻、愛らしいピンクの唇

この世の者とは思えない程の美少女だった
美しかった

鬼道も豪炎寺も自分の心がとろとろに溶けていくのを感じた

鬼道 「まさに かぐや姫だな」

豪炎寺 「支配者が狙うのも無理はないな…」

だが四季菜に言われたんだ、惚れるなど…

四季菜は分かっているんだ、自分には男を虜にしてしまう力がある
のだと…

俺達はこの気持ちを抑えなければならない

鬼道 「お前は今日から俺達の…仲間だ ??」

豪炎寺 「俺にとってもお前は大事な仲間の一人だ、仲間の
事は必ず守る ??」

胸が…締め付け…られる

息をするのが…こんなに…苦しいなんて

だが俺達は…仲間として…お前を守る !!

月から来た少女 イナイレ 第五章

鬼道 「月影、悪いが電話を借りるぞ？」

四季菜 「あ、うん、どうぞ？」

鬼道は別の部屋へ出て行った

円堂 「月影、良かったら…今から河川敷にサッカーしに行かないか？？」

「人生前向いて歩いて行こーぜ☆！」

四季菜 「うん、そだね…」

私はまだまだ不安が一杯渦巻いてるけど、でも円堂君達に支えられる事によって新たな一步を踏み出せそうな気がする……

立ち止まっでは…ダメだ…

今を精一杯生きよう

鬼道 「すまない、待たせたな」

円堂 「どこに電話してたんだ？」

鬼道 「父さんと話した後 引越し業者にも連絡していた」

豪炎寺 「引越し業者？」

鬼道 「ああ、俺は今日からここに住む？」

四季菜 「?? ええええええっ?? なっ何言ってるの??」

鬼道 「俺は本気だ、一緒に居れば何かあってもすぐに駆けつけられるだろう？」

使っていない部屋もたくさんあるみたいだしな、後で業者が家具を運びに来るから☆」

四季菜 （さすがは金持ち息子、電話一本でどうとでもなっちゃうのね（^^;;）

「でもいくらなんでも一つ屋根の下に他人の男女はマズイ…んじやないかな…？」

鬼道 「それは気にするな、何故なら俺とお前は 仲間、なんだろう？（ニヤ」

四季菜 「何かさっきの事を逆手に取られてるような気がする…／／／／」

でも、きっと何もしないよって…事だよな？

鬼道 「お前達はどうするんだ？」

円堂 「うちは…多分…母ちゃんに許してもらえねえな（^^;; ; 「

豪炎寺 「俺も厳しいな…」

鬼道 「そうか、残念だ (ニヤニヤ)」

四季菜 Σ (。 ㄥ。 111) (だから最後のニヤニヤ何な
んだって……?)

円堂 「 鬼道、親父さんに…何て言ったんだ ?」

鬼道 「 全力を尽くして守りたいヤツがいるって言ったら理
解してくれた」

今のって…仲間だからって事だよね？

てか私馬鹿なんじゃない？

期待しないでいいように自分から

予防線を張ったのに――

円堂 「 よおし、じゃあ 河川敷、行くか ?」

四季菜 「 行こう??☆」 (変装してかなくっちゃ?)

〽河川敷〽

円堂 「 ようし、月影っ 思いきり俺に向かってシュ
ートして来い !!!!!

お前の全てを受け止める　！！」

久しぶりだな、ボールに触れるの…

そうそう、この感覚…

蹴り足に力が宿って行くような、この感じ
右足にどんどんパワーがみなぎってくる

……

今だ　！！！！

ドゴオオオオオオーッッ！！！！

円堂　「ゴッド…キャッチ…Gファイ…
うわあああああーっっ」

豪炎寺　「なっ？」

鬼道　「ゴッドキャッチが…破られた…だと？」

円堂　「うはっは？　すごい威力だった…
やっぱりお前はスゲーよ！
なあなあ、必殺技とかあんのか？　やっぱり」

四季菜　「必殺技は……ないっ！！」

円堂　ズルッ↑ズッコケた音

「ま、まあいっつか、十分威力あるからな」

鬼道　「次は俺達からボールを奪ってみろ？」

四季菜 「分かった、行くよ？」

豪炎寺が最初にドリブルを始める

四季菜が前をふさぐ

前からボールのある右側へとまわる

豪炎寺 「フツ 甘いな、」

豪炎寺は四季菜と反対側にいる鬼道にパスを繰り出す

豪炎寺 「鬼道？」

ズバッ！！

豪… 鬼 「何イ？」

何と四季菜は瞬時に鬼道のいる方へと移動していたのだ
そして鬼道に渡るはずのパスを見事にカットしていた

鬼道 「もらったー？？」

鬼道が素早くスライディングをしてきた

四季菜はギリギリのところでボールをヒールで跳ね上げ、ヘディングで円堂の前まで来た

胸でボールを拾うと落ちて来たボールにそのまま回転かけシュートの態勢に入った

四季菜 「行くよ？円堂君！」

円堂 「よし！ 来い！」

四季菜は大きく、高く足を振り上げた

そして、大きく蹴り上げた

円堂 「うおおおおー……お？」

円堂は大きく右に飛んでいた

それを見た四季菜はニヤリと笑い軽く左にフェイントを入れた

ボールはゴールへと静かに入って行った

円… 鬼… 豪 「参りました？」

四季菜 「宇宙人をなめんじゃないよ？（笑）」

鬼道 「じゃあそろそろ、俺達は帰るぞ、家具が来るからな

行くぞ、月影っ」

円堂 「楽しかったな、またサッカーやろうな？ 月影っ？？」
「」

豪炎寺 「変なコト、すんなよな／／／／？」

四季菜 「だっ大丈夫だからっ／／／／／じゃあね」

四季菜と鬼道は四季菜の家に向かって歩き出した

何か不思議

守ってくれる人がそばにいただけで

こんなにも落ち着くなんて

何年振りだろう、この安心感

不安が全部消える事はないけど

氷の世界に突然現われた小さな炎

世界を溶かせるワケではないけど

近くに居ればあたたまる

例えていうならそんな感じ

ありがとう、鬼道君、

背中が頼もしく見えるよ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8583y/>

月から来た少女 イナイレ

2011年11月26日18時59分発行